
さくらとクレパス

風池陽一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さくらとクレパス

【Nコード】

N0947S

【作者名】

風池陽一

【あらすじ】

桜が失せても、クレパスがあれば、また思い出を彩れる。

桜のない写生は、思い出をなぞること。

クレパスがあれば、それができる。

十二月になって最初の日曜日だった。

その日は、薄日もささない今にも雨が降りそうな天気だった。

昼すぎ、たまたま僕は、小学校の近くにある川沿いの土手道を歩いていた。

人通りが少ない日だった。

川は土手から三メートルほど低いところを流れていて、川底の石ころがところどころのぞけるくらい浅かった。

その土手の斜面は、川面があらかた見える傾きと幅があり、そこでは細長い弓なりの野草が枯れていた。

土手道は、桜並木が三百メートルほど続き、春の満開の頃になると見物の人たちでにぎわった。

毎年、その頃になると僕は必ず一人で花見にいった。

僕は桜並木の中ほどをゆっくり歩いて行った。

雪がぱらつきはじめた。

(十二月になったばかりなのに、大阪で雪が降るのは珍しいな。)
だんだんと、ちらつく雪の粒が増えてきて、遠くに降っていた雪がまるで近づいてきたかのように見えた。

そしてゆっくりと舞うやわらかな雪が、僕のまわりをさまよいだした。

(あれっ)、僕は川をへだてた向こう岸のいちばん大きな桜の木が目について立ち止まった。

よく見ると、その木のまわりにだけ桜色に染まった雪が降っていた。

まるでぼっと春の息吹が灯っているようだった。

その時、僕の脳裏にきらきら輝く正八角形の雪の結晶と、ひらひらひらめく五枚の花びらが、小学校の時の教科書からでてきて飛び交う光景が映った。

桜の木をクラスの皆で囲んで、ピンクのクレパスで写生したっけ。「さくらさくら、さくらが咲いた。」と、女の子みたいにはしゃいだなあと思い出にふけていたのはつかの間、たちまち脳裏からその光景が立ち消えた。

気がつくと、桜色の雪がまっ白に戻っていた。

僕は雪が降りつづくなか、また歩きはじめた。

小学校を卒業して二十九年になるけど、僕はこの日見た桜の木が一番いとおしいと思った。

僕が一人で暮らしている部屋の机には、あの桜の木の枝がある。

春になっても、あの桜の木には花が咲かなかった。

枯れ死していたのだ。

僕は生きていれば数十と花をつけただろう枝を見る度に、クレパスを買ってみようと思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0947s/>

さくらとクレパス

2011年9月25日02時07分発行